

教師だからできる、生徒の「あたり前」の見直しへの伴走

生徒が主体となって学校の「あたり前」を見直す際、教師にはどのような伴走が求められるのか。全国の学校のルールメイキングの活動の支援に取り組むカタリバの藤本雅衣子氏に聞いた。

生徒が「あたり前」を見直す上で重要となる教師の存在

中学生・高校生が校則やルールを対話的に見直す「みんなのルールメイキング」は、経済産業省「未来の教室」実証事業として2019年にスタートしました。生徒が教師や保護者との対話を重ねながら、校則やルールにおける納得解をつくる過程を経験する中で、社会で必要な課題発見力・合意形成力・自己効力感などを育むことができますと考えました。つまり、ルールメイキングの価値は、校則やルールをど



認定特定
非営利活動法人
カタリバ
藤本雅衣子
ふじもと まいこ

2021年カタリバ入職。大型イベント「ルールメイキング・サミット」や、ルールメイキングに取り組む教師を支援する「ルールメイキングパートナー制度」の立ち上げを担当。現在は「みんなのルールメイキング」事業責任者。

う変えたかということではなく、どのような対話のプロセスを歩んできたかで決まります。

生徒にとって、異なる価値観の持ち主と互いを尊重し、校則やルールについて話し合うことは、自分と他者の違いを知る機会になり、自己理解を深めるチャンスになります。そうした経験は、納得感のある自己決定を行いながら、自分らしく生きていくために必要なことであり、それもルールメイキングの価値の1つだと私は考えています。

ルールメイキングにおける対話をよりよいものとする上で、教師の存在は重要です。生徒が「なぜ、この校則が必要なのだろう」という疑問を持った時、教師が「それがルールだから」といった言葉を返すのではなく、生徒の「なぜ」に応答し、その疑問とともに考えようとする姿勢を示すことは、生徒が「自分の考えを言ってみよう」と思うきっかけになるでしょう。そして、校則の制定の理由を丁寧に説明した

り、教師自身にも分からないことは「分からない」と正直に答えたりすれば、「疑問にはちゃんと答えてもらえるんだ」といった安心感を生徒は得て、対話のプロセスを歩き続けることができます。

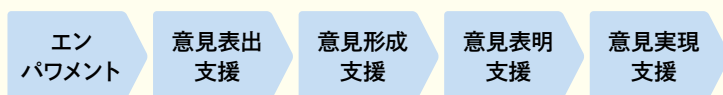
例えば、靴下の色の指定を見直す活動は、大人にとっては些細なことに思えるかもしれませんが、生徒にとっては毎日の生活にかかわる大事なテーマです。矮小化したり、否定したりするのはなく、教師がそれを尊重し、生徒の意見に耳を傾ければ、生徒は当事者として、校則やルールについて話し合いを続けることができます。

意見表明までの ステップに寄り添う

生徒も私たち大人も、いきなり練り上げられた意見を表明することはできません。意見の表明までにはステップを踏む必要があります(図)。

図 生徒が意見を表明し、実現するまでの支援のステップ

教師の働きかけ



最初から意見や結論を求め過ぎず、まずは生徒が思いや疑問を言葉にできる安心・安全なチームをつくる。

多様な他者との対話や交流を通じて、生徒の思いや疑問が「意見」になるように支援する。

出てきた意見の実現に向けて支援する。

最初は自分の気持ちを口に出さず、さえたためらう生徒もいます。教師が生徒の意見にきちんと耳を傾けることを宣誓したり、「先生も、実はこの校則

※藤本氏の提供資料を基に編集部で作成。

は変えた方がよいと思っていたんだ」といった話をしたりするなど、生徒が安心して話ができる場をつくるのが最初のステップです。

「自分はこう思っていた」などと、生徒同士で校則やルールについて自分の気持ちを語り合う中で、徐々に一人ひとりの意見が形作られていきます。その際、自分と同じ環境で学んでいる仲間の意見は、自分の意見を形成していくための材料になります。また、保護者や地域の人たちと校則やルールについて話し合ったり、企業を訪ねて就業規則などのルールについて聞いたり

することからも、新たな気づきを得ることができます。

次のステップでは、生徒が教師に自分たちの意見を伝え、新しい校則やルールを提案し、最終的には教師はその実現に向けて支援します。そして、新しい校則やルールができてからも、生徒の意見を聞きながら見直しを続けていくことが大切です。

なお、生徒が提案した校則やルールは、すべて受け入れなければいけないわけではありません。受け入れられないことは、なぜ受け入れられないのかを説明することが重要です。そして、

「先生から見ると、こういう理由で受け入れ難いんだけど、どう思う？」などと対話続けることで、生徒は新たな気づきを得て、さらに意見を練り上げていくでしょう。また、予算や法律で規制されている事柄など、学校の裁量では見直すことが難しい事情がある場合は、意見を募る前に生徒にその事情をしっかりと伝えておけば、生徒はそれも踏まえて意見を出すはずで

す。ルールメイキングの活動を通して、教師の中にも自校の校則やルールに対して疑問を持っている人が少なくないくことを実感しました。教師も校則やル

ールについての自分の思いを語ることで、職員室の中に多様性を受容する風土をつくることができるはずです。

●教師向け実践ガイド

「児童・生徒とともにつくる学校 POINT BOOK」

<https://rulemaking.jp/news/4029/>

「生徒の意見を取り入れるルールメイキングに取り組んでみたいが、何から始めたらよいか分からない」といった、現場の教師から寄せられた相談を基に、ルールメイキングにおいて大切にしたい観点を具体的な場面の中で紹介している、カタリバ作成の教師向けのルールメイキング実践ガイド。

本特集を振り返って

学校を持続可能にする、 自校の新しい「あたり前」を創る

VIEWnext編集部 統括責任者 柏木 崇



自校の見直すべき「あたり前」に気づけるようになるためには、次の視点で取り組みや活動、仕組み・制度を見るとよいことを、課題整理で紹介しました（詳細はP.7図3）。

視点1 ● 目的に合っているか

視点2 ● 目的に応じた成果を出しているか

視点3 ● 効率的に進められているか

視点4 ● 時代の要請を踏まえているか

視点5 ● 生徒が主語であるか

以上は、教師や自校の内なる視点として持つておくとい視点ですが、それらに加えて外なる視点、すなわち校外の人から見た時に、各取り組みや活動、仕組み・制度

はどうなのかといった視点を取り入れることも、見直すべき「あたり前」に気づくためには重要ではないかと、各校の事例を通じて感じました。例えば、長野県野沢北高校が採点業務の方法を見直したきっかけは、柳沢校長が紹介した全国紙の記事でしたし、今回取材したある学校の先生は「他校から赴任してきた自分だったから、自校の見直すべき『あたり前』に気づけた」とおっしゃっていました。ただ、見直すべきだと思っても、それを指摘するのは簡単なことではないでしょうし、赴任したばかりの先生などであればなおさらかと思えます。そこで重要となるのが、カタリバの藤本

さんのお話にもあった、教師や生徒が自分の思いや疑問を言葉にできる安心・安全な組織・場をつくることです。今回の事例からも分かるように、そつした組織・場をつくれるかどうかは管理職の先生にかかっています。また、「あたり前」が見直されるまでには相応の時間が必要であることも、多くの事例に共通していました。急がずに、少しずつ見直しを進めること、そしてその過程で得られた成果や効果を共有しながら、校内での対話・議論を重ねていくことで、生徒の未来のためにある学校を持続可能な場所とする、自校の新しい「あたり前」が創られるのだと感じました。